

聖書 ヨハネによる福音書 1 章 14～18 節
説教 「あたたかな光」

北星学園大学附属高等学校
校長・宗教主任 今城 慰作

ヨハネによる福音書 1 章 14～18 節

14 言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。 15 ヨハネは、この方について証しをし、声を張り上げて言った。『わたしの後から来られる方は、わたしより優れている。わたしよりも先におられたからである』とわたしが言ったのは、この方のことである。」 16 わたしたちは皆、この方の満ちあふれる豊かさの中から、恵みの上に、更に恵みを受けた。 17 律法はモーセを通して与えられたが、恵みと真理はイエス・キリストを通して現れたからである。 18 いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである。

クリスマスおめでとうございます。クリスマスは約 2000 年前、ベツレヘムという街で、神様のご意思でこの世に生まれたイエス・キリストの誕生を記念してお祝いする日です。キリスト教の暦では、クリスマスから数えて 4 週間前から、アドヴェントという、イエス・キリストの誕生を思い起こし、イエスを迎える心の準備をする期間を過ごします。

学校法人北星学園でも、私が所属する北星学園大学附属高校でも、アドヴェント期間を過ごします。毎年、校舎前のツリーに明かり（LED の電飾となりました）を灯すアドヴェント点灯式を行っています。例年は、情報処理部がプロジェクションマッピングを作成し、吹奏楽部、合唱部、運動系のクラブの有志の生徒たちも加わり、讃美歌を歌い、生徒会長が映像に合わせてカウントダウンを行い、吹奏楽の金管楽器のファンファーレと共に、ツリーの点灯が行われています。

しかし、今年は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大予防のために、あらゆる点で変更を余儀なくされました。大声を出すことができない、密集を避けなければならないなど、様々な意味で自粛をしなければなりません。それだけではありません、この 1 年、ほとんどの行事が中止になり、この点灯式が生徒全体で行えた初めての大きな行事となりました。ですから、私たちは特別な思い入れをもってこの点灯式を行いました。

この 1 年、数えればきりがありませんが、今年度の生徒会行事である学校祭や体育大会、そして 9 月末に、急ぎで企画していたフェスティバルもコロナ感染予防のために中止となりました。クラブ活動も、3 年生にとっては、3 年間時間をかけて鍛錬してきた、その集大成でもある大会が、中止または縮小となりました。1、2 年生もそれぞれにおいて、思い描いていた生活の変更を余儀なくされています。それは、高校生だけではなく、中学生、大学生、社会人、大人たちも同じでしょう。

今なお、世界では新型コロナウイルスの感染拡大が止まりません。特に北海道では警戒期間が延長されました。12月12日時点の統計によると、世界では160万人近くもの方が生命を落としています。亡くなった方々には家族、兄弟、友人がいて、悲しみ、苦しみは、その何倍にもなることでしょう。さらに、感染者はその何十倍もいます。感染予防のために、収入や仕事を失った人、不安の中にいる人がいます。もちろん、そのような悲しみや苦しみは、数字では表しきることのできないものだと思います。

私たちの学校では、アドヴェント点灯式に続いて、「花火」を打ち上げる計画を立てました。これは生徒会が学校祭の後に、花火を打ち上げようとしていた企画を一度断念したので、このような形で実現させたのです。

花火業者の方の配慮があり、当初、想定していた以上の約1000発の花火を打ち上げてもらい、点灯式の後、私たちは暗くなった夜空を見上げました。

花火の前に元生徒会長が後輩たちへ思いを語りました。「今年度はたくさん話し合い、たくさん準備をしてきたけれど、その思いを形に表すことはできなかった。それはとても残念だった。でも、後輩たちにその思いを託します」。

私は、「亡くなった方々、悲しみ、苦しみの中にいる方々、現場で奮闘して下さっている医療従事者、福祉施設の方、地域の方々のことを覚えて共に歩いていきましょう。暗闇の中にも必ず光があることを信じましょう」と語りました。

私自身も、ここ数年、お世話になった方々が天に昇ったということのを思い起こしました。そして未だにダメージから回復できていない、ダメージを抱えていることを思いました。特に2年前に、がんで亡くなった母のことを思っていました。私だけではなく、恐らく誰もが、コロナの1年に限らず、何らかの心の傷を抱えていると思います。

花火を打ち上げると、興奮して道路に飛び出す生徒がいるのではないかと、大騒ぎになるのではないかと心配をしていた先生方もいました（大人として当然のことです）が、それは全くの杞憂でした。生徒たちは皆、夜空に打ちあがる花火の光を、ただただ見上げただけでした。地域の方々も、突然大きな音が鳴り、驚いて外へ出て、花火が打ちあがっている様子をご覧になっていました。

花火を見ながら、私の目には不思議と涙が溢れてきました。近くにいた生徒も黙って見ていて、中には涙を流している生徒もいました。この1年間、それぞれに色々な思いを抱えていたのでしょう。我慢したり、不安の中にあったり、不本意な事柄をも、仕方がないこととして受け止めなければならぬことがありました。何らかの心の痛みを抱えている人もいたと思います。この先どのようなようになっていくのかという見通しも立たない中、一体どのような理想や希望を抱いたらいいのか、と問いかけてきた人もいたことでしょう。

花火の光は、華やかに様々な色と美しい形をもって周囲を照らし、そして儚く消えていきました。まるで、人間の一生のように、様々な輝きを放って、夜空に留まり続けることなく、手を伸ばしても捕まえることはできず、時間の流れと共に消えていきました。

ある生徒がこんなことを言ってくれました。「暗い世の中でも、光があると前に進もうと思えますね」。北海道の寒い気温でしたが、私は、こんなに「温かな花火の光を見たことはない」と胸が熱くなる思いで

した。

今、私たちはロウソクを灯しています。4本の光は、それぞれ希望・平和・喜び・愛を象徴的に表しています。

聖書には、こう書かれています。

約2000年前、ローマ帝国の支配下の暗闇の中に生きていたユダヤの人々は、先祖代々から伝えられた「救い主」の誕生を待ち望んでいました。そのような中で、神のご意志として、苦しみ、悲しみ、悩み、迷う人間といつも共にいることを示すために、人間の姿として、肉体をもった神の子、イエス・キリストがこの世にお生まれになりました。彼の生き方と教えを通して、私たちに道を示されたのです。

世界は様々な混乱に加えて、コロナ禍の暗闇の中にあります。21世紀の人類の科学技術を駆使しても、小さなウイルスが起こす感染症は、一人の力では立ち向かえないことを教えています。人は皆が協力し合い、助け合い、共に歩まなければならないということを、改めて教えられています。

私たち一人一人は小さく、できることは限られています。そのような小さい私たちでも、世の中で光を灯すことが、希望、平和、喜び、愛へと繋がっていきます。

今、生きている世界で、すべてが無意味だと思える時、答えが分からない問いの前に立つとき、悲しみ、苦しみ、切なさの中にあるとき、光は私たちに示してくれます。世界が厚い雲に覆われていても、たとえ暗闇の中にあっても、光があれば前に進むことができる。

クリスマス。それは、私たちの前に神様の光が現れる。それが神様の御心です。人間は誰一人として決して見捨てられることなく、神様は私たちと共にいてくださる。愛の光のぬくもりに包まれる。そんなクリスマスの出来事をどうか思い起こしていただきたいと思います。

父なる神様、あなたは暗闇の中に、恐れ、迷い、悲しむ私たちのもとに、幼子イエスを送ってくださいました。私たち一人一人はそれを受け取る資格のない者であっても、あなたの恵みによって、全ての者が神様とともに愛の温かな光に包まれていることを示されました。どうか聖霊の力をもって、勇気と希望をもって、隣人と共に歩ませてください。イエス・キリストの御名前によって、祈ります。アーメン。